

# 飼い犬散歩時におけるマナーと規範活性化に関する考察

東北工業大学 学生会員 ○宮崎 弘太郎

東北工業大学 正 会 員 中井 周作

東北工業大学 正 会 員 菊池 輝

## 1. はじめに

大阪府佐野市での「犬税」導入検討に代表されるように、ペットのフン害は、まちの環境美化の問題として社会的に無視できない問題となっている。現実的に条例によって罰金等を規定する行政も存在するが、この問題はそもそも飼い主のモラルやマナーの問題である。本研究では、犬の飼い主のマナー意識とフン等処理の関係性を分析するために、アンケート調査を行った。主な調査項目は、散歩時の持ち物やペットへの愛着度、フン等処理の実態に加え、社会心理学の規範活性化理論に基づく重要性認知・責任感・道德意識である。この調査結果に基づき、本稿では飼い犬散歩時の規範活性化を阻害する心理要因について報告する。

## 2. 規範活性化理論

社会的ジレンマを解消する上で、各人の道德意識というものが重要な役割を果たすという事が知られている。道德意識とは、「善悪の原理や基準についての社会的規範に自らの行動を合致させようとする意識」であり、協力行動を誘発するための先行要因の一つと考えられている。そして、道德意識の活性化を期待するアプローチに関して、その代表的な理論にシュワルツの規範活性化理論<sup>1)</sup>というものがある。この理論によると、道德意識の活性化には、まず「マナー遵守が必要とされている」という社会的な重要性の認知形成（以下、重要性認知）がきっかけとなる。次に自らの行動がもたらす社会的影響に対する非協力行動のどちらかを選択するのは他ならぬ自分自身の責任であるという信念（以下、責任感）を活性化し、最終段階でその責任を（もし能力的に可能であるなら）全うすべきであるという信念が活性化される。すなわち、協力行動をするべきであるという道德意識が段階的に形成される。

飼い犬散歩時に、「フンなどの後始末はやる」という前提のもと、ペットのフン尿処理マナーについて規範活性化理論をあてはめると、まず、「フン尿処理は公共マナーの問題として解決が求められている」という重要性を認知したのち、「フン尿処理は飼い主の責任」という責任感が形成される必要がある。そして「フン尿処理は飼い主の道德意識の問題」として心理的に活性化される。本研究では、この規範活性化理論をフン尿処理問題に適用する。

## 3. アンケートの概要

規範活性化理論を適用するにあたり、アンケート調査を実施してデータを収集した。平成 24 年 11 月下旬に仙台市内で犬を飼育している住宅に調査票をポストに配布した。なお回収は郵送回収であり、回収率は 50.3%（配布数 200）であった。主な質問項目と尺度構成は以下の通りである。

- ・ 道德意識：フン尿処理は道德的問題かどうかを 5 件法で質問した。
- ・ 責任感：飼い主の責任感について 2 問設定し、5 件法で質問。信頼性分析の結果( $\alpha=0.75$ )、一定程度の信頼性が認められたので、2 尺度の平均値を責任感尺度とした。
- ・ 重要性認知：公共マナーや景観上の問題意識を設定。信頼性分析の結果( $\alpha=0.71$ )、一定程度の信頼性が認められたので、2 尺度の平均値を重要性尺度とした。
- ・ 規範活性化の妨害要因：マナー遵守の非有効性知覚（自分自身がマナー遵守することがフン尿処理マナー向上に有効とはならない、という知覚）ならびに知覚実行コスト（自分自身がマナー遵守するために払うコストの大きさの知覚）に関する心理尺度を質問項目を設定した。
- ・ その他：散歩時におけるマナー意識やペットへの愛着度、個人属性等をたずねた。

---

キーワード 規範活性化理論, ペット飼育マナー

連絡先 〒982-8577 仙台市太白区八木山香澄町 35-1 東北工業大学建設システム工学科 TEL 022-305-3517

## 4. 分析と考察

### 4.1 規範活性化理論の心理要因

重要性認知と責任感の相関係数は 0.416 ( $p<0.01$ )、責任感と道德意識の相関係数は 0.707 ( $p<0.01$ ) となった。どちらも正に有意な相関関係を持ち、ペットのフン尿処理に関して規範活性化理論の成立が確認できた。続いて、これらの心理指標に関して、フン処理と尿処理を実際に行っているか否かの 2 群間に有意差があるかどうか検定を行った (表 1)。フン処理に関しては、毎回必ず処理する人の各心理指標は、それ以外の人に比べて高く、責任感と道德意識については有意差が見られた。逆に、重要性認知には差が見られなかった。すなわち、処理する人／しない人では、重要性認知のレベルには変わりがないものの、何らかの阻害要因により、責任感が向上していない、と考えられる。尿処理に関しては、やはり毎回必ず処理する人の各心理指標値は高く、重要性認知と道德意識に有意差の傾向、責任感に有意差が見られた。すべての指標において差が見られること、処理している回答者がかなり少ないことを考えると、尿処理については、マナー問題としての意識がまだまだ低いものと考えられる。

表 1 フン・尿処理行動と心理指標

|       |        | フン処理  |    |          | 尿処理   |    |         |
|-------|--------|-------|----|----------|-------|----|---------|
|       |        | 平均値   | N  | t 値      | 平均値   | N  | t 値     |
| 重要性認知 | 毎回する   | 4.517 | 90 | 1.484    | 4.733 | 15 | 0.070*  |
|       | 忘れる/放置 | 3.875 | 4  |          | 4.457 | 70 |         |
| 責任感   | 毎回する   | 4.799 | 92 | 4.834**  | 4.906 | 16 | 0.026** |
|       | 忘れる/放置 | 4.507 | 4  |          | 4.697 | 71 |         |
| 道德意識  | 毎回する   | 4.640 | 89 | 5.376*** | 4.750 | 16 | 0.098*  |
|       | 忘れる/放置 | 3.250 | 4  |          | 4.507 | 69 |         |

\*: $p<0.1$ , \*\*: $p<0.05$ , \*\*\*: $p<0.01$

### 4.2 規範活性化の妨害要因

上述の分析において、マナー向上には責任感が重要な心理要因であることが示唆されたが、この責任感の向上を阻害する要因は何であろうか。既往研究では、非有効性知覚（他者依存、行政依存）と知覚実行コストの影響が大きいと言われている。そこで、責任感を従属変数、重要性認知・非有効性知覚・知覚実行コストを独立変数とした回帰分析を行った (表 2)。

非有効性知覚（行政依存）は有意な変数とはならなかったが、非有効性知覚（他者依存）と知覚実行コストは、責任感を活性化する重要性認知と同等の影響力を示した。すなわち、「みんなが処理しないから自分もしなくて良い」あるいは「処理は面倒だ」という考えが責任感の向上に負の影響を与え、景観や公共マナーに関する重要性を認知したとしても、それを打ち消す程度の影響力があることが分かった。

表 2 回帰分析結果

|              | 標準化偏回帰係数 | t 値       | F 値=17.377 ***<br>自由度調整済決定係数 : 0.408 |
|--------------|----------|-----------|--------------------------------------|
| 重要性認知        | 0.346    | 4.355***  |                                      |
| 非有効性知覚（他者依存） | -0.366   | -3.894*** |                                      |
| 非有効性知覚（行政依存） | -0.081   | -0.900    |                                      |
| 知覚実行コスト      | -0.284   | -3.498*** |                                      |

\*\*\*: $p<0.01$

## 参考文献

- 1) Schwartz, S.H. (1977) Normative influences on altruism. in L. Berkowitz(Ed.), *Advances in experimental psychology*, vol.10., New York: Academic Press, 222-280.